

「子育てを通して」

黒田 雄顕

私事ではございますが、昨年秋に第一子が誕生しました。妻と協力しながら子どもとの生活が始まると、日々、育児の大変さを身にしみて感じています。しかし、それと同時に自分もこれほど手をかけて育ててもらったことに改めて気づきました。

子育てをする中で、はじめて気づかされることが多々あります。子どもが静かに眠っている時、泣いているわけでもなく、親を求めているわけでもないのに、心配で様子を見に行ってしまうことがあります。そんな時、ふと如来さまのお心を思うのです。

煩惱にまなこさえられて 摂取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり

私たち衆生が真実から眼を背け眠りこけていても、如来さまのことを忘れてしまっても、たとえ如来さまに背を向け、求めていなくても、如来さまは常に私のことを案じて下さっているのだと、そのようなことを感じるのです。

また、いのちは授かりものと申しますが、私自身、そのことを忘れ、いのちを我がものとして好き勝手に生きてきたように思います。『教行信証』信巻の『涅槃経』の引文に、

まさ
当に知るべし、もろもろの衆生は、みなこれ如来の^{みこ}子なり

とあるように、我々はみな如来さまからいただいた尊いいのちを生きる如来さまの子どもであったのです。

如来さまの大悲の心と、私のちっぽけな心とでは似ても似つきませんが、親になってはじめて「親さま」ということを感じるようになりました。

教えを学ぶだけでは、なかなか素直に領けない私ですが、子育てを通して、日々の生活こそが仏法聴聞の場であると実感しました。